Art in Hospital

患者と医療従事者に優しい病院環境をつくる

がん診療拠点病院の「規範」を目指す

⑫ 神奈川県立がんセンター（神奈川県横浜市）

PFI方式で整備・運営されている神奈川県立がんセンター

前身の神奈川県立成人病センターから改編する形で1986年に発足した神奈川県立がんセンターは、昨年11月、近隣の県有地に新病院を開院した。四角形を組み合わせ、白と茶を基調色とした外観はとてもシンプルだ。赤池信総長は「機能第一に考えて設計しています」と話す。

そうは言っても、機能一点張りというわけではない。院内の壁と廊下はオフホワイトで、場所によっては木板も使っていたり、随所にシンプルで印象深いアートを飾っていたりしているので、温かみを感じる。

再出発を切るに当たって、PFIによる整備・運営を行うことになった。PFIとは、公共施設などの建設や維持管理、運営などを民間の資金や経営能力、技術的能力を活用して行う手法のこと。PFI事業者が医療以外の分野で低コストで質の高いサービスの提供を担っている。

患者視点に立った整備方針の一つが、あらゆる待ち時間の短縮だ。具体的には、「受付→採血・採尿検査→診療→予約→会計」という流れをスムーズな動線にしたり、外来診察室や外来化学療法室のベッド、手術室を拡充したりすることで外来待ち時間や治療待機期間を短縮した。

患者の動線を考えたエントランス

魚や鳥などをイメージしたアートが飾られているアートストリート。患者の憩いの場だ

患者がリクライニングシートに横たわっていても、冷暖気が直撃しないようになっている

病室は窓側に水回りが配置されたユニークな造り

がんに関する情報提供や体験者によるピアサポートが行われる情報コーナー

ランドマークタワーや富士山が見える緩和ケア病棟の屋上庭園

また、「高度で最新のがん医療の推進」を掲げ、放射線治療で放射線治療装置（リニアック）を4台と倍増。PET-CTや高性能なCT、MRIなどの最新装置も導入した。

療養環境の改善にも力を入れ、4床部屋は1床当たり9.5平方㍍と広いスペースを確保した。また、シャワーやトイレを完備した個室を68床から119床に増床している。

がん患者の心配や不安を解消するため、看護師やソーシャルワーカーによる相談の他、がん体験者によるピアサポート（同じような立場の人によるサポート）も特徴の一つだ。そのための施設である情報コーナーでは、食事や療養方法に関する簡単な療養教室なども開いている。

新病院は併設の臨床研究所で「がんのテーラーメイド医療」の診断法や治療法の確立を目指している。また、重粒子線治療の施設を来年12月に開設する。同様の施設は全国で5カ所目。重粒子線治療は他の放射線治療に比べてピンポイントでがん細部を照射でき、副作用が少ないとされる。新病院は都道府県がん診療連携拠点病院の規範となる病院として期待されている。